

すでに開戦を決意しているアメリカは、甲案も乙案も蹴ります。つまり、その回答として十一月二十六日、ハルノートを突きつけてくるのです。このハルノートはいわゆる宣戦布告です。日本が譲歩に譲歩を重ね、最後は甲案・乙案まで作って努力したものを、ハルノートは拒否したのです。拒否したばかりかハルノートは、一つには、「仏印は勿論、シナ（中国）全土から一切の陸海軍と警察を全面的に撤退すること。」二つには、「日本が日清・日露戦争で得た権益、すなわち満州も放棄せよ。」三つには、「シナ（中国）においては蒋介石の重慶政府以外は全部否認すること、つまり汪政権や満州政権も認めない。」

四つには、「日独伊三国同盟を死文化すること。」
これらをぶつけてきたわけです。

日本は真っ青になりました。閣僚全員、これは宣戦布告だと認識します。このことをパール博士は「このような最後通牒を受けたならば、たとえモナコ王国やルクセンブルク公国でも、アメリカに対して武器を持って立ち上がったであろう」と言っています。これだけなめられたら、どのような国でも立ち上がらざるを得ないだろうと言うのです。ハル自身もこのノートを出した後「私のやることはこれで終わった。後はスティムソン君（陸軍長官）とノックス君（海軍長官）の出番だよ。」と言ったそうです。陸海軍の出番、つまり戦争だという意味です。ハルもこれはちゃんと宣戦布告だと知っていたのです。

スティムソン日記には「日本を最初の発砲者たらしめるのは危険であったが誰が侵略者であるかを明らかにし、アメリカ国民の完全な支持を得るには望ましい方法だ」と書いています。その日記には、ハル、スティムソン、ノックス、ルーズベルトの四人組が集まっては、どうやったら日本が挑戦してくるかを幾度も相談したと書いてあります。

この日本に対する挑発の一例が、カムラン湾沖に出した四隻のおとり船です。おとり船というのは軍艦にしたた廃船です。これを浮かべて、日本がこれを攻撃したら戦争のきっかけにしろというのです。ルーズベルトは十二月一日が日本の攻めてくる日であると判断しまして、十二月一日に各地の軍司令官宛に戦争準備の指令を出しています。しかしハワイの軍司令官だけには出していません。もう一つ重要なことが後から発見されています。パトナム少佐の日記がウェーキー島で日本軍に押収されたのですが、この日記には、十一月二十七日、即ちハルノートの翌日、アメリカは開戦の秘密命令を出していることが詳しく書かれています。パトナム少佐自身がウェーキー島に派遣され、日本の軍艦を見たらすぐさま撃つて良いという秘密命令を受けていたのです。